

『古今和歌六帖』 出典未詳歌注釈稿―第六帖 (21) 鷺／水鶏―

福田 智子

『古今和歌六帖』は、約四千五百首の歌を、二十五項目、五百十七題に分類した類題和歌集である。収載歌には、『万葉集』『古今集』『後撰集』など、出典の明らかな歌もある一方、現在では出典未詳と言わざるを得ない歌もある。本稿では、「鷺」から「水鶏」までの題に配されている出典未詳歌、八首について注釈を施す。本稿にて、一連の『古今和歌六帖』第六帖の出典未詳歌注釈を終える。

凡例

- 一、本稿は、『古今和歌六帖』所載の和歌について、考証の結果、出典の見出せなかった歌について注釈を加えるものである。本稿では八首を収めた。
 - 永青文庫蔵北岡文庫本 略称(永)
 - 肥前島原松平文庫本 略称(松)
- 二、歌番号は、『新編国歌大観』の通し番号を用い、歌題を()を付して記す。
 - 内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本 略称(和)
 - 内閣文庫蔵林羅山旧蔵本 略称(羅)
 - 神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本 略称(林)
 - 神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本 略称(宮)
 - 田林義信氏旧蔵本 略称(田)
 - ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本 略称(黒)
 - 寛文九年版本 略称(寛)
- 三、底本は、『新編国歌大観』と同じく、宮内庁書陵部蔵桂宮本とする。
- 四、本文は、踊り字を解消して当該の文字に改め、歴史的仮名遣いに統一する。本文を校訂した場合には、もとの本文を()に入れて傍記する。また、私見によって濁点を付す。さらに、送り仮名など、底本にない文字を補った場合には、本文の右に「・」を付す。ただし、漢字仮名遣いの区別は底本のままとする。
- 五、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は示さず、語の異なるのみを示す。諸本とその略称は次のとおりである。

なお、諸本本文は、主として国文学研究資料館所蔵のマイクロ・紙焼き資料に拠ったが、次の三本については個々の資料に拠った。

（永）細川家永青文庫叢刊3 『古今和詞六帖（下）』（汲古書院、昭和五十八年一月）所収の影印

（松）肥前島原松平文庫所蔵の原本および紙焼き資料

（寛）架蔵本

六、他出には、『古今和歌六帖』からの引用と思われる歌について、歌集の名称（『新編国歌大観』の目次に拠る）、巻数、部立、歌番号、歌題、詞書、作者名、歌本文、左注を順に示す。

七、考察中の和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。引用形式は、原則として、「和歌本文」（歌集名・部立・歌番号・作者名・詞書）とする。『万葉集』の番号は、新・旧の順で表記し、本文には適宜漢字を当てる。なお、必要に応じて、歌集名に底本の名称を冠することもある。

八、巻末には、鷺々水鶏、そして第六帖最後の課題、燕の歌（四四八〇～四四九四番）の別出歌一覧を付す。

注 釈

四四八〇（やぐら）

【本文】

たかしまやゆるぎのもりのさぎすらもひとりはねじとあらそふもの（物）を

【校異】なし

【語釈】○ゆるぎのもりのさぎ 「ゆるぎのもり（万木の杜）」は、現在の滋賀県高島市にあった森。「さぎ」（鷺）は、鶴に似た、やや小型の鳥。樹上に巢を作り、集団繁殖地を形成する。「鷺はいとみめも見苦し。

まなこみなどもうたてよるづになつかしからねど、ゆるぎの森にひとり寝じと争ふらむ、をかし。」（『枕草子』）。○あらそふ 相手と競う。張り合う。鷺が夜間に鳴き騒ぐさまを、共寝の相手を取り合っていると見立てた。鷺がねぐらで騒ぐことは、「さぎのゐるまつばらいかにさわぐらんしらはうたてさとよむなり」（二度本金葉集・雑上・五五六・和泉式部・和泉式部石山にまゐりけるにおほつにとまりてよふけてききければ、人のけはひあまたしてのしりけるをたづねければ、下人のよねしらげ侍るなりとまうしければよめる）にも詠まれている。

【通釈】あの高島の万木の森の鷺でさえも、独りでは寝るまいと張り合うのに（私は独り寝をすることだよ）。

【他出】

『夫木和歌抄』卷第二十二雑部四、一〇〇八五番

ゆるぎのもり、緩木、近江

題しらず、六二

読しらず

たかしまやゆるぎのもりのさぎすらもひとりはねじとあらそふものを

『歌枕名寄』卷第二十三高島篇、六〇八二番

並七

万木杜

六帖

たかしまやゆるぎのもりのさぎすらもひとりはねじとあらそふものを

【考察】

木の上に集団でねぐらを作る鷺は、あたかも共寝をする相手を取り合っているように、夜間鳴き騒ぐ。鷺でも独り寝をするまいとしているのに、甘んじて独り寝をしている作者が、その境遇を嘆いた歌である。男性の立場で詠まれたのであろう。

「たかしま」という地名は、『万葉集』に集中して見られる。「いづくにか我が宿りせむ高島の勝野の原にこの日暮れなば」（巻三・二七七・二七五）、「高島の阿波白波は騒けども我は家思ふ廬悲しみ」（巻七・一二四二・一二三八）、「高島の吾跡川波は騒けども我は家思ふ宿り悲しみ」（巻九・一六九四・一六九〇・高島にして作る歌二首）、「旅なれば夜中にわきて照る月の高島山に隠らく惜しも」（巻九・一六九五・二六九一・同）他がある。勅撰集においては、『拾遺集』が初出で、「たかしまやみをの中山そまたててつくりかさねよちよのなみくら」（拾遺集・神楽・六〇五・よみ人しらず・安和元年大嘗会風俗／みを山）は、安和元年（九六八）の冷泉天皇の大嘗会の風俗歌である。この時、近江国野洲郡が悠紀方の国郡に定められた。平安中期には、他にも「高島や松の梢にふく風の身にしむ時ぞ鹿も鳴きける」（新拾遺集・秋下・四六六・増基法師・題しらず）という歌があるが、用例数は稀少である。ただし、長和五年（一〇一六）、後一条院の大嘗会の際にも、屏風歌の中に、「紅葉せるゆるぎの杜にます神は手向のにしきちらさざらなん」（大嘗会悠紀主基和歌・二七〇・後一条院 長和五年十一月二日／御屏風歌 六帖／戊帖／暮秋／ゆるぎの森のなかに社あり、旅人紅葉を見やれり）、「高島の三尾がさきなる浪の花をればぞいとどかず増りける」（同・二七一・同／三尾がさきに岸に波たつ、旅人これを見る）

という二首の用例が見出される。平安期に入ると、「高島」は、もっぱら大嘗会和歌に詠まれる地名である。

その「たかしま」の「ゆるぎのもり」を詠んだのは、当該歌がごく早い例と見られる。単独で「ゆるぎのもり」を詠んだ例も、「雪ふればゆるぎのもりのえだわかずよるひるさぎのゐるかとおもふ」（好忠集・三五二・十二月中）、「かぜふけばゆるぎのもりのひとつまつまつちのとのとぐらなりけり」（好忠集・順百首・五七〇・つちのと）が早い。とくに前者は、「さぎ」を詠んでいる点で当該歌と共通する。後には「いとなくゆるぎのもりのこのまよりのどかに月はみえずやあるらむ」（国基集・三五・緩木森月）、「いはねどもひとりねじとおもふかなゆるぎのもりのさぎならなくに」（有房集・二九二・しのおこひ）、「しろささぎひとりねじのこゑすなりゆるぎのもりのくれがたの空」（正治初度百首・九五・御製（後鳥羽院）・鳥五首）などの例がある。『有房集』と『正治初度百首』の歌は、「ひとりねじ」という句をもそのままに「さぎ」を詠んでおり、当該歌を踏まえた詠である。

なお、「ひとりねじ」とことやさぎもふるゆきのゆるぎのもりにたちもさわがず」（千五百番歌合・一七七五・内大臣・八百八十八番／右）という歌について、判詞は「ゆるぎのもりにさわがぬ白鷺」は「つねにおもひよりがたきさま」と評する。当該歌の表現世界がひとつの本意を獲得していたことが知られる。

四四八一（さぎ）

【本文】

水まさるよどの川瀬にたつさぎのたちてもなかなぬひぞなき

【校異】 ○さき―路(林)

【語釈】 ○水まさるよどの川瀬に立つさぎの 水かさが増えた淀川(琵琶湖を水源として大阪湾に注ぐ)の瀬に立つ鷺のように。淀川が増水するのは五月雨の頃のさまをいうか。同音反復で「たちでもゐても」を導く序詞。 ○たちでもゐても 立っていてもすわっていても。いつも絶えず。『万葉集』に頻出する表現。 ○なかぬひぞなき 「(鷺が)鳴かぬ」に「(私が)泣かぬ」を掛ける。

【通釈】 水かさが増えた淀川の瀬に立つ鷺が、立ってもすわってもいつも鳴かない日とてないように、私も(恋の思いに)いつも泣かない日とてない。

【他出】

『夫木和歌抄』 卷第二十四雑部六、一一〇〇八番

(よど川、山城)

題しらず、六帖

よみ人不知

水まさるよどの川せにたつ鷺のたちでも居てもなかぬ日ぞなき

『夫木和歌抄』 卷第二十七雑部九動物部、一二六八九番

鷺、六六

読人不知

水まさるよどの川瀬に立つ鷺のたちでもゐても鳴かぬひぞなき

【考察】

水かさが増した淀川の瀬に立ち、絶えず鳴きながら日々を過ぐす鷺のさまに、絶えず泣きながら日々を過ぐす作者自身を重ねて嘆いた歌である。作者が泣くのは、恋の思いによってであろう。

淀川の増水は、『古今集』に「まこもかるよどのさは水雨ふればつねよりことにまさるわがこひ」(恋二・五八七・つらゆき)と詠まれる他、

「五月待つほどにさはみづまさりつつよどのまこもおひにけるかな」(元真集・一七八・三宮にこちまきたてまつるとて)、「雨ふれば草葉の露もまさりけりよどの渡を思ひやるかな」(順集・一九七・正月雨ふる日、東宮にさぶらひて、雨の心の歌をたてまつるとて、もじひとつをさぐりて、なもじたまはれり)、「水まさるよどのまこもおひの世にふかく物思ふ春にも有るかな」(宇津保物語・かすがまうで・一六八・平中納言殿(正明)などの歌に詠まれている。「淀(む)」という名をもちながら、実際は水かさが増した淀川の様子が、詠歌の素材として見出されたのだろう。

一方、「よどの川瀬」という語句は、当該歌がごく初期の用例と見られる。後には、「かりくらしかたのましばをりしきて淀の河せの月をみるかな」(新古今集・冬・六八八・左近中将公衡・鷹狩の心をよみ侍りける)、「うきしづみあそぶあさ瀬やおほからんよどの川せにかもめむれゐる」(正治初度百首・一〇九六・経家・鳥)などの例もあるが、「さぎ」との組み合わせは、当該歌以外、管見に入らない。

「さぎ」が水の流れに「たつ」さまは、「さぎたてる五月のさはのあやめぐさよそめは人のひくかとぞ見る」(好忠集・一二七・夏中、五月はじめ)、「さぎたてるみぎはのさはだあらすかもふるみながらにはるをくらせる」(長能集・五・丹波にてわづらふことありしかば、ひさしう京にもかへらざりしほどに、つれづれにて、みゆるものにつけてよみあつめてはべりし、立春の事なり／あら田に鷺のゐたるを見て)というように詠まれている。『長能集』歌は、詞書を信ずれば眼前の景を詠んだものであるが、『好忠集』歌は三百六十首和歌で、いわゆる定数歌の中の一首であり、このような鷺の様子が歌材としてある程度定着しているこ

とが知られる。

「たちでもゐても」という表現は、『万葉集』に頻出する。「岬回の荒磯に寄する五百重波立ちても居ても我が思へる君」(巻四・五七一・五六八・大宰帥大伴卿、大納言に任せられ、京に入らむとする時に、府の官人ら、卿を筑前国の蘆城の駅家に餞する歌四首・右の一首、筑前掾門部連石足)、「秋されば雁飛び越ゆる龍田山立ちても居ても君をしそ思ふ」(巻十・二二九八・二二九四・山に寄する)、「春柳葛城山に立つ雲の立ちても居ても妹をしそ思ふ」(巻十一・二四五七・二四五三)、「遠つ人獵路の池に住む鳥の立ちても居ても君をしそ思ふ」(巻十二・三二〇三・三二〇八九)、「……渚には 葦鴨騒き さざれ波 立ちても居ても 漕ぎ巡り 見れども飽かず……」(巻十七・四〇一七・三九九三)といった用例がある。

一方、「なかぬひぞなき」の用例が見られるのは、平安期に入ってからである。「はまちどりあきとしなればあさざりにかたまどはしてなかぬ日ぞなき」(是貞親王家歌合・三三)といった歌合歌の他、「すをわけてをりふしひとりあしたづの世をうみなかなかぬ日ぞなき」(延喜御集・二〇・などおほせられけれど、つひに名たちて、えつかうまつらで、つれづれ猶ひとりごちけり)、「はるふかきみやまざくらもちりぬればよをうぐひすのなかぬ日ぞなき」(延喜御集・二五・この御門は、はじめ東宮にすゑたてまつり給へりける大宮の御はらなりけり、御かたちもいとめでたくおはしましければ、御をちの大臣二人ながら御むすめたてまつり給ふ、東宮に位ゆづりたまはんとときこえ給けるほどに、かくれさせたまひにければ、あめのしたこひたてまつらぬ人なかりけり)、「此ごろはさみだれちかみ郭公おもひだれてなかぬ日ぞなき」(貫之集・六六一)

などの私家集にも見出される。「さほやまにたなびくかすみ見るごとにもをこひつつかかぬひぞなき」(家持集・一八六)も『万葉集』には見当たらず、平安期の例と見做されよう。勅撰集においては、『後撰集』の「このごろはさみだれちかみ郭公思ひみだれてなかぬ日ぞなき」(夏・一六三・よみ人しらず・題しらず)が初出で、「秋風の打吹くごとに高砂のをのへのしかのなかぬ日ぞなき」(拾遺集・秋・一九一・よみ人しらず・題しらず)という歌が続く。『古今六帖』にも他に「すみよしのまつほどひさになりぬればあしたづのねになかぬ日ぞなき」(古今六帖・第五・二八二六・人をまつ)が見える。いずれも「(鳥が)鳴く」に「泣く」を掛け、また、恋心を詠むことが多い。

四四八二(さぎ)

【本文】

ひるよりもゆるぎのりにすむさぎのやすきいもねずこひあかしつる

【校異】 ○こひあかしつる―恋明しつ、(和・宮)

【語釈】 ○ひるよりも 昼間から。「より」は動作の起点を表す。「も」は強め。 ○ゆるぎのりも 四四八〇番「語釈」参照。歌枕「ゆるぎのり」(万木の杜)の「万木」に「揺るぎ」を掛け、恋人を思つてあれこれと思いを巡らす様子を表す。不安定な恋心を詠んだ例としては、後世の歌ではあるが、「いかにしてなびくけしきもなき人にこころゆるぎのりをしらせん」(金葉集〈三奏本〉・恋下・四七九・源経兼朝臣・顕季卿家にて恋のこころを)がある。 ○やすきいもねず 安らかに眠ることとせず。「い(寝)も寝ず」は、寝もしないの意。「夜はやすき寝も寝ず、闇の夜に出て、穴をくじり、垣間見、まとひあへり。」(『竹取物

語)。○こひあかしつる「恋ひ明かす」は、恋しさがつのつて眠れないまま夜を明かす意。

【通釈】 昼間から恋人を思つて心が揺れる、万木の森に棲む鷺は、安らかに眠ることもせず、恋しさがつのり眠れないまま夜を明かしてしまつたことだ。

【他出】 なし

【考察】

夜になると寝ずに鳴き騒ぐ万木の森の鷺(四四八〇番参照)に、恋人を思つて眠れないまま夜を明かした作者を重ねた歌である。加えて、「万木」に「揺るぎ」を掛けることで、夜のみならず、昼間から恋人への思いをあれこれ巡らして心を揺らすという、両者共通の心情を詠んだ歌と解した。

「やさきいもねず」という表現は、夙に『万葉集』に見える。「我妹子にまたも近江の安の川 安寐毛不宿尔 恋ひ渡るかも」(巻十二・三二七一・三二五七)という歌の第四句について、西本願寺本では、「ヤスキイモ(ヤスイモ) ネズニ」と訓ぜられている。平安期に入つても、「うちはへてやさきいもねずきりぎりすあきのよなよななさわたるらむ」(躬恒集・六六・あき)という用例が見出される。

また、「こひあかす」という語も、『万葉集』に「磯城島の 大和の国に 人さには 満ちてあれども 藤波の 思ひもとほり 若草の 思ひ付きにし 君が目に 恋ひや明かさむ 長きこの夜を」(巻十三・三三二六二・三三二四八・相聞)という例があり、平安期に入ると、十世紀後半以降、『古今六帖』の「われのみとおもふはやまのいさめさといさめに君をこひあかしつる」(第五・二六九〇・よるひとりをり)を

はじめとして、「あきはててしぐれふりにしわがつまを冬のよすがらこひあかしつる」(好忠集・三一三・中の冬、十一月上)、「たまくらやそでのなかなるきりぎりすなくなく人をこひあかすかな」(肥後集・一〇四・あかつきがた京ごくどのにて、すだれをまきあげて人人なげしにまくらをしてふしたるに、袖のなかにきりぎりすのなけば)、「波のよるいはねにたてるそなれ松まだねもいらす恋ひあかしつる」(基俊集・七四・よるのこひ)などの歌があるが、用例はそれほど多くない。なお、『基俊集』歌の下旬は、当該歌と表現が類似する。

四四八四(はこどり)

【本文】

はるたてば野べにまづなくはこどりのめにもみえずてこゑのかなしき

【校異】 ○めにもみえずて―目には見えず(松) めには見えず(羅) めにはみえず(田)

【語釈】 ○はこどり 箱鳥。「顔鳥」の異名というが、未詳。○めにもみえずて 目にも見えないで。「ずて」は、打消の助動詞「ず」に接続助詞「て」の付いたもの。……ないで。

【通釈】 立春になると、野辺で真つ先に鳴く箱鳥は、姿は目にも見えな

いで、鳴く声の心にしみることよ。

【他出】 なし

【考察】

立春を告げる箱鳥は、その名のとおり「箱」の中に隠れているかのよう

に姿を見せずに鳴く。その声に感慨を催した歌である。「はこどり」がどのような鳥かは判然としないが、春の到来とともに

に「まづなく」鳥といえは、やはり鶯であろう。『万葉集』にも「春さればまづ鳴く鳥のうぐひすの言先立ちし君をし待たむ」（巻十・一九三九・一九三五）という歌がある。一方、「はこどり」は、春を告げる鳥としてではなく、「故郷のことづてかとはこ鳥のなくをうれしと思ひけるかな」（増基法師集・九七・はこ鳥のなくをきき侍りて）では、故郷からの便りを伝える鳥としても詠まれている。だが、最も多いのは、「箱」の縁語仕立てで詠まれた歌であろう。「開け／明け」を掛ける「はこどりのあけてのちはなげくともねぐらながらのこゑをきかばや」（実方集・三一八・東宮のくらといふ人に）の他、「蓋」や「身」とともに詠まれた「なつのよのあけほのごとはこどりのふたよりみよりなきわたるかな」（千穎集・一二・夏十二首）という歌もある。また、『斎宮女御集』の贈答歌、「はこどりの身をいたづらになしはててあかずかなしき物をこそ思へ」（一七八・おなじ内侍、とりのこをかがみのはこのふたにいでて、はこどりとなむいふときこえたる、かしこければかへしつかはすとて）、「くものうへにおもひのぼれるはこどりのいのちばかりぞみじかりける」（一七九・御かへし）では、鳥の卵を箱の蓋に入れるという趣向から「箱鳥」を詠んでいる。『源氏物語』の「みやま木にねぐらさだむるはこ鳥もいかでか花の色にあくべき」（若菜上・四八〇・夕霧）は、「みやまぎに夜はきてぬるはこどりのあけてかへらん事ぞわびしき」（藤六集・一九・たちはきてあか月にかへるとて）を踏まえていよう。このように、「はこどり」の歌は主として私家集に見られ、また、贈答歌が目につくことから、当時の貴族社会において、存外身近な歌材であったのではないかと思われる。

「みえずて」という表現は、『万葉集』に「夢にだに見えはこそあれ

かくばかり見えずてあるは恋ひて死ねとか」（巻四・七五二・七四九）、「我が恋は慰めかねつまけ長く夢に見えずて年の経ぬれば」（巻十一・二八二五・二八一四）の二首の歌があるが、平安期に入っても用例は少なく、「秋はぎをしがらみふせてなくしかのめには見えずておとのさやけさ」（古今集・秋上二二七・よみ人しらず・題しらず）、「待つ人の影はみえずてあきやまの月のひかりぞそでにいりぬる」（重之集・二六五・秋廿）、「ひさかたの日てるかたにも冬のはしみこそまされいろは見えずて」（賀茂保憲女集・一一九・ふゆ）といった用例を挙げるにとどまる。平安期には、万葉風の古めかしい表現として捉えられていた可能性があろう。そこで注目すべきは、『古今六帖』第六所収の二首の歌、「女郎花ふきすぎてくる秋風は目にはみえずてかこそしるけれ」（三六七四・をみなへし）、「花すすきはほはおけどもはつしもの色は見えずてきえぬべらなり」（三六九五・つらゆき・すすき）である。前者は『古今集』秋上、二三四番歌で、第四句「めには見えねど」、後者は『買之集』（陽明文庫本）八三番歌で、第四句「色はみえずぞ」という本文をそれぞれもっている。『古今六帖』諸本では、いずれの歌も「……みえずて」で、ほぼ異文はない。この部分については、あるいは『古今六帖』の方がその和歌本文の古態を残しているといえるのかもしれない。「こゑのかなしき」の用例には、「つとに行く雁の鳴く音は我がごとく物思へかも声の悲しき」（万葉集・巻十・二二四・二二三七）、「こむといひしほどやすぎぬる秋ののに誰松虫ぞこゑのかなしき」（後撰集・秋上・二五九・つらゆき・題しらず）、「初雁は恋しき人のつらなれやたびのそらとぶ声の悲しき」（源氏物語・須磨・二〇〇・光源氏）などがある。雁や松虫について詠んでいる。秋の季節感を伴う用例が比較的

多く、立春を詠んだ当該歌とは一線を画す。ここはむしろ、『万葉集』の「……百鳥の 来居て鳴く声 春されば 聞きのかなしも……」(巻十八・四一・一三・四〇八九・独り幄の裏に居りて、遙かに霍公鳥の喧くを聞きて作る歌一首)との発想の共通点を指摘しておくべきであろう。

四四八五(はこどり)

【本文】

とりかへす物にもがもやはこどりのあけてくやしき物をこそおもへ

【校異】 ○物にも―もにも(宮) ○あけてくやしき―^{あけて}めには見えくやしき(羅) ○物をこそ―物こそ(和・林) ものこそ(宮)

【語釈】○物にもがもや「……にもがもや」の「に」は指定の表現「なり」の連用形。「もがも」は、終助詞「もが」「も」の重なったもの。ここでは、詠嘆の「や」の下接した形で強い願望を表す。○はこどりの「あけて」(開けて/明けて)に付く枕詞。○あけてくやしき 夜が明けてしまい、取り戻せない時間を後悔する心情をいう。浦島子の伝説に拠る(考察)参照)。

【通釈】(昨夜のことを)取り返したいものだなあ。(夜が)明けた今朝はたいへん残念だと後悔することだよ。

【他出】なし

【考察】

恋人への飽かぬ思いを抱えて夜明けを迎えた残念さ、後悔の念を、枕詞「はこどりの」を用いて詠んだ歌である。「とふこゑはいつとなけれどほととぎすあけてくやしき物をこそおもへ」(蜻蛉日記・下・二二九・むまのかみ(速度))は、下句が当該歌と一致する。

「……にもがもや」という表現は、『古今六帖』にも他に、「わがきみがおゆるがをしささだのいけのこもにもかもやかりあげはやさん」(第六・三八〇九・こも)の例が見える。『万葉集』に三例「鳥にもがもや」(巻五・八八〇・八七六)、「花にもがもや」(巻二十・四三九九・四三二五)、「玉にもがもや」(巻二十・四四〇一・四三七七)があり、万葉風の言い回しと見られよう。

「あけてくやし」という表現は、浦島子の伝説に由来する。『万葉集』には、「……家ゆ出でて 三年の間に 垣もなく 家失せめやと この箱を 開きて見てば ものごと 家はあらむと 玉くしげ 少し開くに 白雲の 箱より出でて 常世辺に たなびきぬれば 立ち走り 叫び袖振り 臥いまるび 足ずりしつ つ たちまちに 心消失せぬ 若かりし 肌もしわみぬ 黒かりし 髪も白けぬ ゆなゆなは 息さへ絶えて 後つひに 命死にける……」(巻九・二七四四・一七四〇・水江の浦島子を詠む一首)と伝えられている。平安期においても、『伊勢大輔集』の贈答歌、「あけてみるかひもあるかなたまくしげふたみのうらによするしらなみ」(一五六・かたがふ、とて人のもとにいきたりしに、いへあるじのちごに丁子をいれてとらせたりしかば、おやおこせたりし)、「かひもなきうらしまのこがはこなればあけてくやしく人やみらん」(一五七・かへし)に、浦島子の箱が詠まれている。

一方、当該歌のように、恋歌における夜明けの悔しさを詠んだ歌は、前掲『蜻蛉日記』の用例の他、『信明集』の「しののめのあけざりしかば夜もすがらまきのとよりは立帰りにし」(一〇五・おなじころいきてたたくにあけねば、をとこ)、「夏の夜もまきの板戸もいたづらにあけてくやしくおもほゆるかな」(一〇六・返し)、『定頼集』の「さ夜なかに

猶たちかへれあまの戸は明けてくやしき物としりにき」(一三七・後のよ、いきたるに、かどをあけていひいでたる)、「ほどなしとなげきしものを独ねてあげがたきにも袖はぬれけり」(一三八・かへし)といった私家集の贈答歌に見出される。

なお、「はこどり」と「あけてくやし」との組み合わせは、後の例であるが、「まちわびて諸声に鳴くよはごとくに明けてくやしき箱鳥の声」(林葉累塵集・恋二・八八〇・僧宗知)に見える。

結句「物をこそおもへ」は、『万葉集』にはなく、勅撰集初出は『拾遺集』である。平安中期には『蜻蛉日記』の他、『重之集』『好忠集』『実方集』の例が目立つ。

四四八八(かほどり)

【本文】

夕されば野べに鳴くてふかほどりのかほにみえつつわすられなくに

【校異】○夕されば―春されは(和) 夕されは(林) 春されは(宮) ○ わす・れなくに―わすられなくに(永・宮) 忘れなくに(松・和・羅・林・田・黒・寛)

【語釈】○かほどり 顔鳥。鳥の名であるが、どのような鳥であるかは未詳。当該歌では、夕方になると鳴くと伝えられるという。夕方になると恋人に逢いたい気持ちを募らせる作者の比喩。第三句まで同音反復で「かほに」を導く序詞。○かほにみえつつ(恋人の)面影がちらちら見えて。「かほにみゆ」の和歌の用例はきわめて珍しい(【考察】参照)。○わすられなくに 忘れられないなあ。「なくに」は打消「ず」のク語法形「なく」に助詞が付いたもの。詠嘆。

【通釈】夕方になると、野辺に鳴くという顔鳥のその名のように、あの人の「顔」(面影)がちらちら見えて、忘れられないなあ。

【他出】

『源氏物語古注釈書引用和歌』(4)「河海抄」被柱 一五四五番

夕されば野べに鳴くてふかほどりのかほにみえつつわすられなくに

『源氏物語古注釈書引用和歌』(4)「河海抄」宿木 一八八六番

夕されば野べに鳴くなるかほどりのかほにみえつつわすられなくに

【考察】

夕方になると鳴くという「かほどり」を、夕方になると恋人への思いを募らせる作者の姿に重ね、「かほどり」の「かほ」という名から「かほにみゆ」という表現を導くことで、夕方の薄暮の中、恋人の面影がちらついて忘れられない切なさを詠んだ歌であろう。

「かほどり」は、つとに『万葉集』に、「春日を 春日の山の 高座の 三笠の山に 朝去らず 雲居たなびき かほ鳥の 間なくしば鳴く……」(卷三・三七五・三七二・山部宿祢赤人、春日野に登りて作る歌一首)、「……奈良の都は かぎろひの 春にしなれば 春日山 三笠の野辺に 桜花 木の暗隠り かほ鳥は 間なくしば鳴く……」(卷六・一〇五一・一〇四七・奈良の故郷を悲しびて作る歌一首)、「朝あでに来鳴くかほ鳥汝だにも君に恋ふれや時終へず鳴く」(卷十・一八二七・一八二三)、「かほ鳥の間なくしば鳴く春の野の草根の繁き恋もするかも」(卷十・一九〇二・一八九八・鳥に寄する)、「……山辺には 桜花散り かほ鳥の 間なくしば鳴く……」(卷十七・三九九六・三九七三)という歌がある。季節は春で、絶え間なく鳴く鳥として詠まれている。当該歌の初句「夕されば」に、『古今六帖』

諸本により「春されば」の異文が生じているのは、これらの万葉歌に引かれた可能性があろう。

平安期に入ると、「おとはやまこのした影にかほどりのみえがくれせしかほのこひしさ」(伊勢集・四一七)、「まどひつついくよへぬらんかほ鳥の見えし山ぢのなほもはるけき」(元真集・三一〇)、「かほ鳥の声もききしにかよふやとしげみを分けてけふぞ尋ぬる」(源氏物語・宿木・七二二・薰)というように、聴覚ではなく、視覚的な認識に詠歌の焦点が移る。当該歌もこれらの平安期の歌と同様の詠みぶりと見られよう。

【語釈】でも述べたように、「かほにみゆ」という表現は、『新編国歌大観』を検するかぎり他例を見ないが、『万葉集』に見出される「面影に見ゆ」「面に見ゆ」という表現から来るものと見た。すなわち、「夜のほろろ我が出でて来れば我妹子が思へりしくし面影に見ゆ」(巻四・七五七・七五四)、「しきたへの衣手離れて我を待つとあるらむ児らは面影に見ゆ」(巻十一・二六一・二六〇七)、「燈火のかげにかがよふうつせみの妹が笑まひし面影に見ゆ」(巻十一・二六五〇・二六四二)、「年も経ず帰り来なむと朝影に待つらむ妹し面影に見ゆ」(巻十二・三二五・三二三八)、「狭野山に打つや斧音の遠かども寝もとか児ろが面に見えつる」(巻十四・三四九二・三四七三)といった用例である。とくに巻十四の「面に見ゆ」の例は、当該歌の「顔に見ゆ」の類例として注目される。なお、当該歌は、『河海抄』によれば、『源氏物語』の引き歌として、真木柱巻と宿木巻に用いられている。前者は光源氏が髭黒に迎えられた玉鬘に対し、面影がちらついて忘れられないと訴える場面、後者は薫が亡き大君の面影を追って浮舟に辿り着いた場面である。

結句「わすられなく」の用例は、『万葉集』にあるが、「不所忘」(巻三・

四三四・四三二)、「所忘莫苦二」(巻十一・二六〇二・二五九七)、「不所忘尔」(巻十二・三一八九・三一七五)という表記の西本願寺本の訓である。勅撰集においては、「いそのかみふるからをののものがしは本の心はわすられなく」(古今集・雑上・八八六・よみ人しらず・題しらず)が初出で、もう一例『風雅集』(恋四・二二九)にある歌は、先に指摘した『万葉集』(巻十一・二六〇二・二五九七)の再録である。平安期には、他に「かすがののなかのあさがほおもかげにみえつついまもわすられなく」(伊勢集・四一三)が見出される程度であり、万葉歌の平安期の訓の用例として位置付けるのが穏当であろう。

四四八九(かささぎ)

【本文】

よやさむきころもやうすきかささぎのゆきあひのはしに霜やおくらん

【校異】 ○集付―新古神祇(黒) ○をくらん―恋らん(林)

【語釈】 ○かささぎのゆきあひのはし 「かささぎのはし」は、鵲が連なり並んで飛ぶ様子を橋に見立てた表現。七月七日の夜、牽牛と織女が逢うときに、鵲が天の川に渡すという伝説に拠る。「ゆきあひ」が、季節の移り変わりの意であることから、「ゆきあひの橋」は、隣り合わせのふたつの季節にまたがる橋と見た。ここでは、秋から冬へと季節が移り変わる時節に、鵲が羽を並べて飛ぶさまを「橋」に見立てて想像したのであろう。なお、『新古今集』は、本文「かたそぎのゆきあひのま」とする(【考察】参照)。

【通釈】 夜の寒さが身にしみるのか、それとも衣が薄いためにこんなに寒いのか。こんな夜は、鵲が連なり並んで飛ぶ、秋と冬とにまたがる橋

に、霜が置いているのかなあ。

【他出】

『新古今和歌集』卷第十九神祇歌、一八五五番

夜やさむき衣やうすきかたそぎのゆきあひのまより霜やおくらむ

住吉御歌となん

『定家十体』九三番

住吉

よやさむきころもやうすきかたそぎのゆきあひのまよりしもやおく

らむ

『俊頼髓脳』六三番

住吉の神

夜や寒きころもやうすき片そぎのゆきあはぬまより霜やおくらむ

『綺語抄』下、五九八番

よやさむきころもやうすきかたそぎのゆきあはぬはねにしもやおく

らん

『和歌童蒙抄』第一天部、霜、七七番

住吉明神

よやさむきころもやうすきかたそぎのゆきあひのまよりしもやおく

らむ

『奥義抄』中釈、四〇九番

住吉明神

夜やさむき衣やうすきかたそぎのゆきあひのまよりしもやおくらむ

『袋草紙』上卷、二〇四番

住吉御歌

夜や寒き衣やうすきかたそぎの行合のまより霜や置くらむ

『袖中抄』第十八、八七三番

夜やさむきころもやうすきかたそぎのゆきあひの間より霜やおくらん

『袖中抄』第十八、八七七番

夜やふくる衣やうすきかたそぎのゆきあひの橋に霜やふりおける

『和歌色葉』中卷、一八〇番

よや寒き衣やうすきかたそぎのゆきあひのまより霜やおくらむ

『定家八代抄』卷第十九神祇歌、一七五〇番

同(新)

夜やさむき衣やうすきかたそぎの行きあひの間より霜やおくらん

『歌枕名寄』卷第十四住吉篇、三九五六番

新古今十九

夜やさむき衣やうすきかたそぎの行きあひのまより霜やおくらん

右一首、住吉大明神の御歌となん

『色葉和難集』卷四、三〇五番

住吉明神

よやさむき衣やうすきかたそぎのゆきあひのまよりしもやおくらん

『歌林良材』卷下、五八一番

住吉の神

夜やさむき衣やうすきかたそぎの行あひの間より霜やおくらん

『玉伝深秘卷』(古今和歌集古注釈書引用和歌) 三九九番

夜やさむき衣やうすきかたそぎのゆきあひのまに霜やおくらむ

【考察】

今夜がとくに寒いのか、それとも、着ている衣が薄くて寒いのか、と

いぶかしく思いながら、鵲が渡す橋にも霜が置いただろうかと想像して、秋から冬への季節の推移を実感している歌である。『拾遺集』(冬・二二八)にも重出する「夜をさむみねざめてきけばをしぞなく払ひもあへず霜やおくらん」(後撰集・冬・四七八・よみ人しらず・題しらず)は、当該歌の発想に一脈通じるものがある。

「かささぎ」の「はし」に「しも」が置くという歌は、『百人一首』にも採られた「かささぎのわたせる橋におくしものしろきをみれば夜ぞふけにける」(新古今集・冬・六二〇・中納言家持・だいしらず)が、最も人口に膾炙していよう(家持集・二六八にも)。他にも、「かささぎのわたせるはしのしものうへをよはにふみわけことさらにこそ」(大和物語・第二百二十五段・二〇〇・壬生忠岑)、「かささぎのちがふるはしのまどほにてへだつるなかにしもやふるらん」(好忠集・三〇八・十月はてなどの用例がある。

また、「かささぎのゆきあひのはし」の例も、「かささぎのゆきあひのはしにつきなれど猶わたすべき日こそとほけれ」(海人手古良集・二一・秋)があり、この歌は後に、『新勅撰集』(秋上・一九四・大納言師氏・はつ秋の心をよみ侍りける・第二句「ゆきあひのはしの」)に採られた。『古今六帖』にも、他に「なか空にきみもなりなんかささぎのゆきあひのはしにあからめなせそ」(古今六帖・第三・一六一・伊勢イ・はし)という歌がある。

なお、「語釈」において指摘したとおり、「かささぎのゆきあひのはし」は、『新古今集』では「かたそぎのゆきあひのま」という本文になっている。どちらの本文が原初的かという点はしばらく措くとしても、『古今六帖』では「かささぎ」題に収められていることから、当該歌が『古

今六帖』に配される時点では、少なくとも「かささぎ」が詠まれている必要があるだろう。

四四九三(くひな)

【本文】

くひなだにたたけばあくる夏なつのよをこころみじかき人ひとやかへりし

【校異】なし

【語釈】〇くひなだにたたけばあくる夏なつのよ「くひな」(水鶏)は、クイナ科の鳥。鳴き声が戸を叩く音に似ることから、クイナが鳴くことを「叩く」という。「あくる」は、「(戸を)開くる」と「(夜が)明くる」との掛詞。「夏の夜」は短く、男性の訪れに対し、すぐに戸を開けなければ、あつという間に夜が明けてしまう。〇こころみじかき人 短気な人。「夏の夜」の縁で「みじかき」といった。

【通釈】水鶏でさえ、「叩く」(鳴く)とすぐに(夜が)「明ける」短い夏の夜、あなたが戸を「叩く」とすぐに、戸を「開ける」のに、短気なあなたは帰ってしまったのか。

【他出】なし

【考察】

「(水鶏が)叩く／(戸を)叩く」「(夜が)明くる／(戸を)開くる」「短き(夏の夜)／(心)短き(人)」というように語を重ねることにより、水鶏が鳴くとすぐに明けてしまう短い夏の夜、気が短い恋人は、戸を開ける前にさつさと帰ってしまったのかといぶかしんだ女性の歌である。「あくるまを猶たたくこそ夏のよの心みじかきくひななりけれ」(新拾遺集・雑下・一九一五・よみ人しらず・暁くひなをききて)は、当該

歌を踏まえた詠であろう。

「くひな」の勅撰集初出は、『拾遺集』の「たたくとてやどのつまどをあげたれば人もこずゑのくひななりけり」（恋三・八二二・よみ人しらず・題しらず）という歌である。当該歌同様、「くひな」の「叩く」声を、来訪した恋人が戸を「叩く」音と聞き違えた落胆を詠む。

平安中期においては、『花山院歌合』に「くひな」題が見え、「むかしよりあげがたからぬなつのよをいかにとたたくくひななるらむ」（一四・いちこ・左）、「なつのよはたたくくひなにほどもなくあまのととくもあけにけるかな（一五・院御・右）の二首の歌がある。一方、私家集においては、「ひとまてばたたくくひなをそれかとはかなくあくる夏のよぞうき」（賀茂保憲女集・四六・なつ）、「なつの夜はまきのとたたきかくたたき人だのめなるくひななりけり」（和泉式部集・二五・夏）というように百首歌中の一首としても詠まれる。やや時代は下るが、『肥後集』の「まきのとをたたくくひなにことはずいそぎあけてはのちぞくやしき」（七一）、「なつの夜はあまのいはとのあくるまでたたくくひなにいやはねらるる」（七八）の二首の歌も、「くひな」の題詠と見られる。その一方で、注目すべきは、日常詠における用例数の多さだろう。もつとも、「さらでだにふすかとすればあくるよをなにをあかすとたたくくひなぞ」（源賢法眼集・一八）は、詞書がなく詠歌状況は不明であるが、「いひとよのかひとしきけばあぢきなくくひなさへこそおもひやられるれ」（書陵部本能宣集・三三九・ある人の、おものをとりのかたにまるがして、いひとよのこれといひてうたよむに、ほかにいていひやりし）や、「くひなだにたたくおとせばまきのとを心やりにもあけてみてまし」（和泉式部集・七九八・こむとたのためて、みえずなりにける、つ

とめて）は、その例である。さらに目に付くのは贈答歌で、『仲文集』には、「くりやまちまだよひなればねぬなはのわれらがくひなたたくなりけり」（五一・院の大将殿のさぶらひに、くりやがねぬなはたたくをみて、おなじ人）、「てもたゆくたたくくひなものこらねばなほねぬなはのくりやくるしや」（五二・かへし、じじゅうの君）の例があり、『紫式部集』には、「あまのとの月のかよひぢささねどもいかなるかたにたたくくひなぞ」（七二・うちにくひなをなくを、七八日の夕づく夜に、こせうしやうのきみ）、「まきの戸もささでやすらふ月かげになをあかずとたたくくひなぞ」（七三・返し）、「夜もすがらくひなよりけになくなくぞまきのとぐちにたたきわびつる」（七四・夜ふけて戸をたたきし人、つとめて）、「ただならじとばかりたたくくひなゆゑあけてはいかにくやしからまし」（七五・かへし）の一連の歌が載る。紫式部には他にも、『紫式部日記』に、「よもすがらくひなよりけになくなくぞまきの戸ぐちにたたきわびつる」（一七・とをたたく人〈道長〉）、「ただならじとばかりたたくくひなゆゑあけてはいかにくやしからまし」（一八・作者）の用例が見える。さらに、『大斎院前の御集』一六九―一七一には、次のような「くひな」の歌がある。

十三日、月いとおもしろうすみであかし、八月十五夜のもまたかかるときはなしなどいひて、とらのときまでおきてみる、みな人人のねにたればほのぐらきおくつかたなまうとましくみゆれど、月をたのもし人にてながむるほどに、おまへちかきむめのきにくひなのいとをかしうなくに、かたみにをかしと思ふ、
進

月きよみやすらふほどにをりしもあれたたくくひなにおどろかれぬ

る(一六九)

とあれば、さい将

なつの夜はつきみるほどもなきものをあけよとたたくひななりけり(一七〇)

などある事、をりからにやあらん、をかしとおぼゆ

まこととらのかひふくほどにおまへにまゐりて、かかる事な
んざぶらひつるときこえさすれば、あけがたになりぬるかとの
たまはせて

やすらひてみるほどもなきさつきよをなにをあかずとたたくひな
ぞ(一七一)

戸を「叩く」ような声で鳴く「くひな」は、当時の貴族たちにとって身近な鳥であったようである。来ぬ人を待つ思いと重なって、多く女房歌人を中心に上げられている。

附記

本稿は、同志社大学文化情報学部における二〇二二年度春学期の授業「文献講読」において採り上げた内容の一部である。これらの歌のうち、四四九三番については、受講生(中村志樹)がレポートを執筆した。その後、これらすべての歌について、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」(同志社大学人文科学研究所第20期研究会第3研究、二〇一九～二〇二二年度)、および「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の

歴史的研究」(科学研究費助成事業基盤研究(C) 課題番号16K00469、二〇一六～二〇一九年度)の一環として、さらに検討を加えた。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版Ver.2とともに、竹田正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)作成の文字列解析器「eCSA Ver.200」を使用した。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・肥前島原松平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げます。

『古今和歌六帖』別出歌一覧―第六帖、4480～4494番―

凡例

1、『古今和歌六帖』本文と歌番号は、『新編国歌大観』に拠る。作者名・詞書・左注がある場合は、当該歌のあとに()を付して記す。

2、調査対象として、『新編国歌大観』から以下の歌集を選択する。『古今和歌六帖』の成立は十世紀後半と想定されるが、出典としては、やや後世の作品まで調査範囲を設定している。

第一卷 1古今和歌集～4後拾遺和歌集

第二卷 1万葉集～6和漢朗詠集

第三卷 1人丸集～81赤染衛門集

第五卷 1民部卿家歌合～61源大納言家歌合長久二年、253紀師匠曲水宴和

歌～269九品和歌、281歌経標式(真本)～285新撰髓脳290新撰和歌髓脳、347古事記～353風土記、371日本霊異記、372三宝絵、389土左日記～393

和泉式部日記、414竹取物語、420落窪物語

第六卷 2秋萩集、5麗花集

第七卷 1奈良帝御集、36肥後集

なお、『新編国歌大観』に別出が認められない場合は、適宜『新編私家集大成』を参看した。

3、別出歌は、『新編国歌大観』の巻数・通し番号を付した歌集名と歌番号で示す。
〔例〕3、19貫之 355 『新編国歌大観』第三卷19番目の『貫之集』 355番歌

4、別出本文に異なる場合は、句ごとに「」を付して記す。なお、漢字と仮名など、表記上の相違は指摘せず、有意の異なるみに限る。

5、『古今和歌六帖』所収歌には、別の歌集の歌との間で、さまざま類似性有するものがある。そのまま別出歌とは認めにくいもの、まったく無関係に作られたとも考えにくい場合には、〔参考〕と記し、波線を付す。

6、特定の別出歌が指摘できない場合や、十一世紀以降の作品にしか別出が見出せない場合は、いわゆる出典未詳歌として〔未詳〕と記し、傍線を付す。

たか

4480 たかしまやゆるぎのもりのさぎすらもひとり はねじとあらそふものを

〔未詳〕

4481 水まさるよどの川瀬にたつさぎのたちてもあてもなかなぬひぞなき

〔未詳〕

4482 ひるよりもゆるぎのもりにすむさぎのやすきいもねずこひあかしつる
〔未詳〕

はこどり

4483 み山木によるはきて鳴くはこどりのあけばかはらんことをこそおもへ

3-43藤六19 「夜はきてぬる」「あけてかへらん」「事ぞわびしき」

4484 はるたてば野べにまづなくはこどりのめにもみえずてこゑのかなしき

〔未詳〕

4485 とりかへす物にもがもやはこどりのあけてくやしき物をこそおもへ

〔未詳〕

4486 かほどり

かほどりのまなくしばなく春ののくさのねしげきこひもするかな

2-1万葉1902 「くさねのしげき」「こひもするかも」

4487 あさるでにきなくかほどりなれだにも君にこふれば時をへずなく

2-1万葉1827 「きみにこふれや」、3-2赤人128 「あさごとに」「きてな

くことり」「ながだにも」「きみにこふらし」「とこなつになく」

4488 夕されば野べに鳴くてふかほどりのかほにみえつつわすられなくに

〔未詳〕

かささぎ

よやさむきころもやうすきかささぎのゆきあひのはしに霜やおくらん

〔未詳〕

4490 かささぎのみねとびこえて鳴きゆけば夏のよわたる月ぞかくるる

1-2後撰207、2-2新撰万289

もず

4491 春さればもずの草くきみえずとも我はみやらん君があたりをば

2-1万葉
1901

秋の野のをばながすゑに鳴くもずのこゑきくむか行聞く吾妹

2-1万葉
2171 「をばながうれに」「こゑききけむか」「かたきけわぎも」

くひな

4493 くひなだにたたけばあく夏のををこころみじかき人やかへりし

〈未詳〉

つばくらめ

4494 つばめくるときに成りぬとかりがねはふるさとこひてくもがくれなく

2-1万葉
4168 「くにしのひつつ」「くもがくりなく」